

心木木だより

vol.49
2024 夏号

—— 友の会会員の皆さまと記念館を結ぶ会報誌 ——



すぎ出版発行「心のうたかんだあ」(平成3年版)より 詩／坂村真民「一年草のように」 画／海野阿育

坂村家のアルバム

vol.19

流転の二人

「五十年」

(前略)

時代と共に流れ
国家と共に漂い
貧苦に瘦せ
歴史と共に生きた
二人の五十年よ
ただ頑固一徹に
金にもならぬ詩に執して
立身を捨てた男に嫁ぎ
何の不平も愚痴も言わず
天性の美質を失わず
支えとなり
杖となり
柱となり
わたしをわたしらしめてくれた
このひとの五十年よ

(後略)

離れて暮らしていた私に、父(真民)から「真美さん、お母さんが小学校の同級会に一人で行くと言うから一緒に付いて行ってくれんかな」と連



玉名市立月瀬小学校の同級会記念写真 昭和59年10月14日撮影
久代67歳(後列右から3人目)

絡がありました。愛媛県砥部町から熊本県玉名市までの旅です。その時の写真を載せました。母は18歳で結婚しましたから、その年は結婚49年目にあたり、「五十年」の詩を選んでみました。旅の数多くの写真から、この一枚を選んだのは、訳があります。写真にうつる一番左の方、片足が

なく杖をつけておられますね。母は父より8歳若いので、男の同級生の多くは、太平洋戦争に動員され奥地に送られたことでしょう。私は昭和24年生まれで戦争を直接には知りませんが、幼い頃、松葉杖を使っている方々のそのお姿が目に残っています。2024年の現在、テレビで報道されている紛争地域の映像には、地雷で足を吹き飛ばされた兵士やベッドに寝ている爆撃で足を無くした子供達が写り、胸が痛むばかりです。人間の変わらないこれらの繰り返しにも。

今号で、もう一つ押さえておきたいことがあります。真民は自分の人生を振り返ったとき、よく「流転」という言葉を使います。掲載詩にある「流れ」「漂う」、時には「エトランゼ」と表すことも。そんな自分に妻が黙ってついてきてくれたことに、感謝の言葉を捧げています。前回、妻・久代のお母さんは、北海道の人だと書きました。根源、人で言えばルーツを大切にす真民は、妻を母親が生まれた地に連れて行きたかった…。残念ながら十勝地方への旅が叶ったのは、久代がくも膜下出血で倒れた後でした。北海道上川郡新得町にある新得寺さんが「二度とない人生だから」の詩碑を建立して下さり、その除幕式に出席するために、車椅子の妻と共に飛行機に乗った

表紙の詩



一年草のように
生も一度きり
死も一度きり
一度きりの人生だから
一年草のように
独自の花を咲かせよう

この詩は、真民が69歳の時の詩です。
72歳の時の詩「悟り」でも、どんな小さい花でもいい
誰のものでもない独自の花をさかせることだ、と書いて
います。
真民にとって大事なものは、この「独自の花を咲かせ
る」ことなのです。

悟り(72歳)
悟りとは
自分の花を
咲かせることだ
どんな小さい
花でもいい
誰のものでもない
独自の花を
咲かせることだ

のでした。帯広空港に降り立ち、やっと念願だっ
た十勝の空気を妻に吸わせることが出来まし
た。この久代のルーツ探しをもう一歩進めてみま
しょう。久代の母・リヨのお母さんはステと言
い、出身は兵庫県三原郡中篠村、これは淡路島にあ
る地名です。久代の父・徳蔵は熊本↓北海道↓
熊本と居を変え、母・リヨも親が淡路島↓北海
道、自身は北海道↓熊本と移動しています。久
代の体の中にも漂流することを静かに受け止め
る血が流れていたのではないのでしょうか。同じ1
月冬生まれで、似合いの二人が出逢ったと言えま
しょう。

結婚後の朝鮮時代に進む予定でしたが、ここ
で私は、二人は何年添い遂げたのだろうかと気
になり始めました。久代は、くも膜下出血の後、
手を組めば歩くことが出来、車椅子で移動が可
能でした。けれどもその後、脳梗塞を発症し寝
たきり状態になります。真民は、「寝たきりでも
いい。傍にいてくれるだけでいい。」と久代を生
活の中心においた日々が始まり、97歳で89歳の久代
を残して亡くなりました。71年間の夫婦生活を
全うしたのです。けれど私は、もう1年間追加し
たい気持ちです。と言うのは、しばらく真民のお
骨を仏壇に置いていました。そして一周忌を迎

え、遺言とおり一部を海へ散骨、残りをお墓に納
めました。その頃の久代はかなり重篤な状態で
したけれど、僅かですが自分で直そうとする力
が残っていて、危機を乗り越えていました。けれ
ど家にあつたお骨が無くなると、その微かな灯が
消えてゆき、納骨4か月後に静かに息を引き取
りました。物も言えず目も殆ど見えなかったの
ですが、全部わかっていたのかなあ、お骨をしっか
り守っていたのだなあーしみじみそう思います。
「四十年」という詩には、流転、貧乏、茫茫四十
年とあり、その第一歩は次回秋号にて。

文／西澤真美子

坂村真民記念館からのお知らせ

夏休み企画展 「自分の花を咲かせよう」開催

開催期間 2024年7月6日(土)～10月20日(日)

坂村真民記念館では、7月6日(土)から10月20日(日)までの会期で夏休み企画展「自分の花を咲かせよう」を開催することとしました。

坂村真民が若い人たちに一番伝えたかったことは、「どんなに小さい花でもいい、自分の花を咲かせよう」ということでした。誰かの真似をするのではなく、自分で苦労して考え、自分独自の花を咲かせてほしいと願っていました。

人生の先輩として、苦しい事、つらい事、悲しい事をいっぱい経験してきた真民さんの詩には、若い人たちがこれから生きてゆくために必要な、「人間として生きるためのヒント」が書き込まれています。

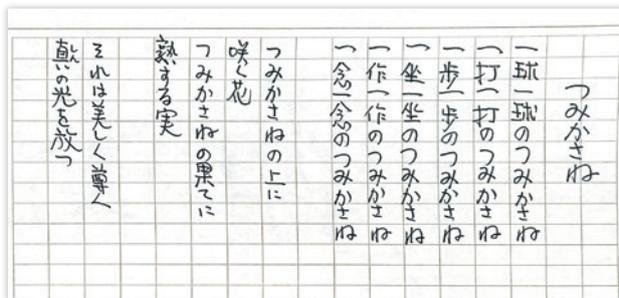
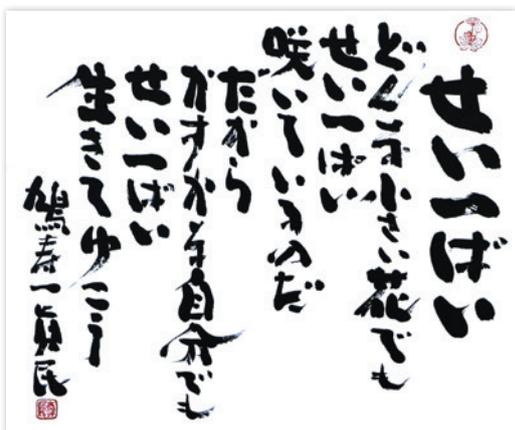
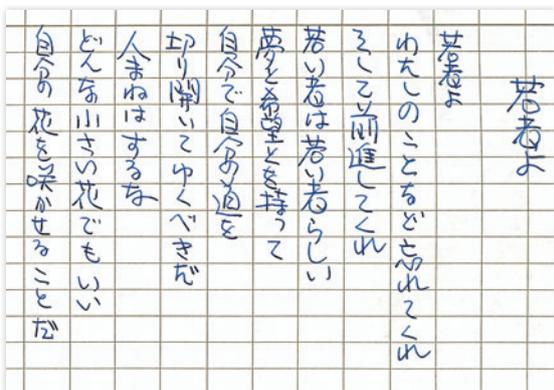
また、真民さんは若い人たちが、いろいろな経験をし、失敗も重ね、時間をかけて成長してゆくことを心から

願っていました。

今回の企画展では、こうした真民さんの思いを多くの人に知ってもらうため、一万篇の真民詩の中から、若い人たちに是非読んでもらいたい詩を中心に展示し、宇和島東高校の教師をしていた頃の「卒業生を送る言葉」や、随筆集に載せられた「自分の花を咲かせよう」という文章なども展示しています。

時間をかけて、こつこつと、自分の道を歩いてきた真民さんからの、「温かく優しい言葉」に勇気づけられ、生きる希望を見つけられることと思います。

若い人たちはもちろん、毎日を一生懸命に生きていく多くの方々が、これからの人生のなかで、失敗や挫折を恐れることなく自分の道を進み、それぞれ自分の花を咲かせることができますように心から願っています。



タンポポの根のごとく花のごとく

〔宇和島東高校校友会雑誌「鬼ヶ城第15号」

（昭和40年3月発行より）

坂村真民

多くの人がこの世に書き残したものを
われわれが学んできたのは
すべてこれ生き堪える力を
身につけるためだったのだ
新しい時代には
新しい生き方がある
それを過去の遺産から
学びとることが
本当の生きた学問なのだ
これから若い諸君の身にふりかかってくる
であろう
いかなる試練にも困苦にも
打ち勝ち乗り越えてゆく力が
もつとも大切なものであって
わたしはそれを諸君に望み
諸君を送る言葉として
一人で湛えることができなかったら
師に救いを求め給え
友に力を貸してもらい給え

それもできない時は
神仏にすがり給え
決して一人で苦しみ
一人で解決しようとしないうことだ
声を合わせて歌おう
腕を組んで進もう
それが新しい時代に生きる
新しい者の姿だ
疎外感とか
孤独感とか
そのような言葉の魅力に
すぐに心酔するな
真の幸福は
疎外・孤独・絶望
そうした門を突破して
初めて開けてくるものだ
どこまでも誠意によって生き
要領によって生きようとするな
本ものと贗ものを見分ける眼を養え
自己を閉ざしては駄目だ
強い連帯感のなかに生きてゆけ
愚痴を言うな
弱音を吐くな
勇気と正義をもって貫いてゆけ
ごまかしはすぐばれる

タンポポの根のごとく
踏みにじられても
食いちぎられても
芽を出し
花をつける
強さを持って
幸福をまき散らすというのが
タンポポの花ことばだが
自分の幸せを求めながら
人の幸せを考えてゆく
人間になれ
それをこのタンポポから学べ
きずつき倒れている
一羽の小鳥を助けてやる
善意の心を失わずにゆけ
零下十数度の寒冷にも堪えて咲く
この小さな野草の強さを
身につけようではないか
若い諸君よ
タンポポの根のごとく
強い力で生き堪え
タンポポの花のごとく
人生を美しく送ってくれ給え

出会いを生む真民詩に感謝

ボランティアガイド 客本泰子

ボランティアガイド養成講座で、真民さんや真民詩を深く知ったという客本さん。全国から記念館を訪れる多くの方と語り、心動かされる日々を過ごせるのは、真民先生のおかげと感謝している。



私が坂村真民記念館のボランティアガイドを始めたのは、記念館のボランティアガイド養成講座の一期生募集があった時でした。

当時私は「砥部の里陶街道五十三次ボランティアガイド」という会で活動していました。その会長さんの「砥部でボランティアガイドをしているのだから記念館の養成講座を受けて勉強してみませんか」との一言でした。

主人の定年で砥部に帰ってきた私は「念ずれば花ひらく」が真民先生の詩で、砥部に住んでいらっしやっした事ぐらいしか知りませんでした。もちろんお会いした事ありません。こんな私にガイドが出来るのだろうかと不安もありました。しかし真民詩を通して生き方・考え方などを学んでいくうち真民先生の大ファンになりました。高校時代は詩集をいつもカバンに入れ、暇さえあれば読んでいた、詩の好きな私だったので、苦しみながらも前向きに生みだされた詩に私は心を動かされ、皆さんに知ってもらいたいとガイドを始めました。

そして十二年が経ちました。記念館には日本中からいろいろお客様がいらっしやいます。

◎一度は来てみたかった。やっと来れましたと言われた方は本当にうれしそうでした。

◎最愛の父を亡くしました。父に捧げる詩を捜しに来ましたという女性の方。

◎車椅子の息子さんと一緒に来られたお母様が私は元気な息子を生まだのに事故でこんな体になりました。最初は何も出来なかったが頑張っているようにになりました。今日も車の中で記念館の看板を見て行きたいと言ったので連れてきましたと。

◎いろいろ悩んでいるけど母には心配するから言えないと私に自分の気持ちを話された三十代の男性がいました。私がお母様と同じくらいの年頃だったのか、私はお話を聞くことしか出来ませんでした。

たくさんの方といろいろなお話をしました。ガイドをしていなかったらこんな経験できなかったと思います。

私の好きな詩の一つに「生きてゆく力がなくなる時」があります。その中の死のうと思ふ日はないが生きてゆく力がなくなる時という文章を読む度に私にもそんな日があったなと思

います。そんな時、私は詩集を何度も読み返し元気をもらっています。

「バスの中で」を読んでいて高校から6年間バスで松山に通っていた私がバスの中で見た風景と同じだと気がつきました。同じ路線で通っておられた先生も同じ風景を見ておられてそして詩にされたのかなと感動しました。

まだまだたくさん好きな詩はあります。「愛」もその一つです。この詩はガイド仲間の方に教えて頂きました。「わたしは愛媛で育ちはしなかったが育った人と同じくらい、いやそれ以上に愛媛を愛してきた」

愛媛でたくさんさんの詩を作ってくださり、愛媛を砥部を愛して下さった真民先生の事、これからもお客様にお伝えしたいと思っています。

生きてゆく力がなくなるとき

死のうと思ふ日はないが

生きてゆく力がなくなることがある

そんな時お寺を訪ね

わたしはひとり

仏陀の前に坐ってくる

かわき明日を思ふ心が

出てくるまで坐ってくる

坂村真民記念館を応援しています



『木は氣なり』

百年の木には百年の氣が宿り
千年の木には千年の氣が宿る

鳩寿四 真民詩

南木曾木材産業株式会社

〒399-5302 長野県木曾郡南木曾町吾妻1187 代表取締役 柴原 薫

TEL 0264-57-4000 FAX 0264-57-2006 <http://www.nagiso.co.jp> メール kao@nagiso.co.jp

砥部の地で、医療、看護、介護の三位一体を実現する砥部病院



介護付有料老人ホーム
To-be

全78居室/20㎡~24㎡(1F&2F)



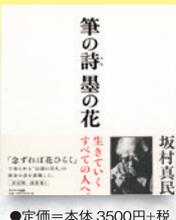
住宅型有料老人ホーム
モンレーヴ砥部

全18居室/40㎡~90㎡(3F)

伊予郡砥部町麻生51-1(砥部病院西隣) TEL.089-969-0085 砥部病院ケアサービス株式会社

サンマーク出版 坂村真民の本

詩墨集
筆の詩墨の花



●定価=本体 3500円+税

坂村真民記念館
所蔵の作品を満載!

随筆集
念ずれば花ひらく



●定価=本体 1800円+税

初めての
随筆集を復刻!



10万部突破の
超ロングセラー!

いま届けたい、生き方の道しるべ



詩集
宇宙のまなざし

詩集●定価=本体各1000円+税



詩集
二度とない人生だから

サンマーク出版

〒169-0075 東京都新宿区高田馬場 2-16-11
TEL 03 (5272) 3166 FAX 03 (5272) 3167
<http://www.sunmark.co.jp>

広告募集中

「タンポポだより」に広告を出してくださる
企業・団体等を募集しています。

[広告料]

1枠(タテ60mm×ヨコ170mm) …… 年間10万円

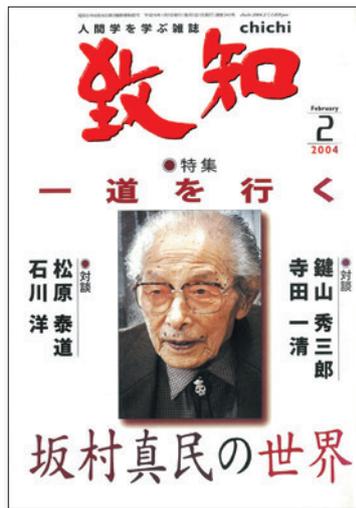
- 年間発行部数/2,000部(年4回発行)
- 送付先/友の会会員、県内社会教育施設、県内旅行・観光業者等その他、記念館の来館者に配布

「タンポポだより」の発行費用は、この広告料で賄っています。それによって、友の会の会員の皆様からの会費は、タンポポだよりの送付料や記念館の活動経費に充てることが出来ます。記念館の活動を充実させるためにも、広告料収入が必要不可欠です。どうぞ、このような趣旨をご理解くださり、広告掲載へのご協力をお願いします。





書店では手に入らないながらも、
口コミで増え続け、
11万人に定期購読されている
日本で唯一の
人間学を学ぶ月刊誌です



月刊誌「致知」
有名無名やジャンルを問わず、
各界各分野で一道を
切り開いてこられた方々の
貴重な体験談を
毎号紹介しています。

致知出版社

〒150-0001 東京都渋谷区神宮前4-24-9

TEL.03 (3796) 2111 (平日9:00~17:30) FAX.03 (3796) 2108

致知 検索



坂村真民記念館友の会 会員募集中

坂村真民記念館友の会は、会員の皆様と記念館との交流を図り、記念館を共に支え、育てていくことを目的とした会です。入会された方には会報と、真民グッズなどの記念品を贈呈します。

パスポート会員 年会費2000円	特典 会員証で入館無料1人 ほか
一般会員 年会費5000円	特典 会員証で入館無料1人 ほか
特別会員 年会費10,000円	特典 会員証で入館無料2人 ほか
法人会員 年会費10,000円	特典 会員証で入館無料2人、 観覧券10枚贈呈 ほか

詳しくはホームページをご覧ください

坂村真民記念館 友の会

検索

〈編集後記〉

「坂村家のアルバム」の中のキーワード・“流転”に触発されて、自分が住んだ土地を数えてみますと、なんと両手の指が折れてしまいました。やはり、しっかりと引き継いでいるようです。けれど今は、父・真民と同様に、私も砥部に根を降ろしています。(真美子)

タンポポだより vol.49 夏号

令和6年6月1日発行

発行元／坂村真民記念館友の会事務局

〒791-2132 伊予郡砥部町大南705 坂村真民記念館内

TEL089-969-3643 FAX089-969-3644

〔坂村真民記念館〕

開館時間／9～17時(入館は16時30分まで)

休館日／月曜(月曜が祝日の場合は翌日)、12月29日～1月1日

入館料／65歳以上300円、一般400円、高校生・大学生300円、

小・中学生200円 ※15人以上の団体は割引あり